

パネルディスカッション

演 題	: 水を巡る地域教育	
コーディネーター	: 岐阜協立大学教授	森 誠一 氏
パネリスト	: 大野市開成中学校教諭	中川 美穂 氏
	大槌町立大槌学園前学園長	小石 敦子 氏
	世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ館長	池谷 幸樹 氏
	滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員	金尾 滋史 氏

○森 誠一 氏

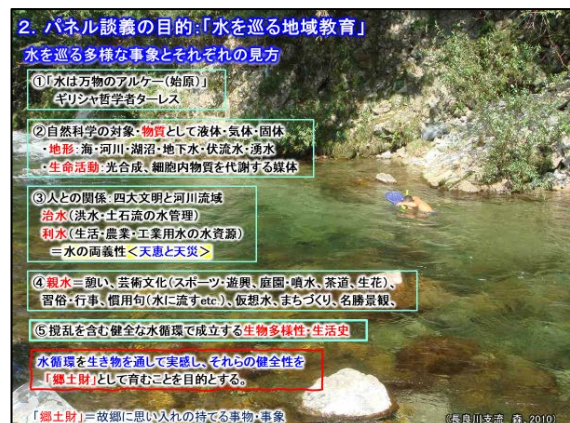
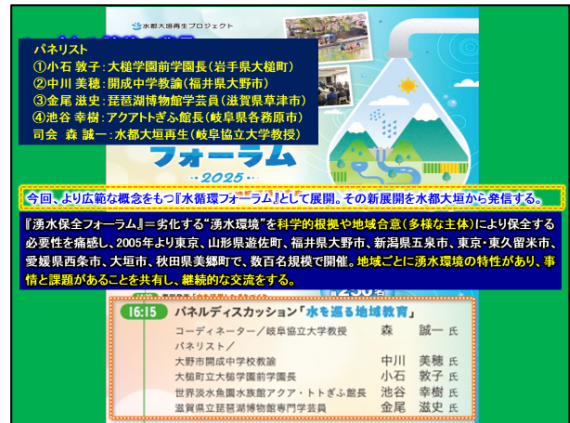
これまで、大垣市を含め、全国的に劣化の一途である湧水環境を科学的根拠と地域合意によって維持・保全する必要性が痛感され、この20年の間に東京（2005年）、山形県遊佐町（2006年）、福井県大野市（2007年）、新潟県五泉市（2008年）、東京・東久留米市（2010年）、西条市（2012年）、大垣市（2014年）、秋田県美郷町（2016年）などで、それぞれの地元を中心に多様な主体によって「湧水保全フォーラム」が数百名規模で開催されてきました。

地域ごとに湧水環境に特性があり、事情や課題があることを共有しながら、どういう形で健全な湧水保全ということができているのか、あるいは湧水環境を守れるのかということについて議論してまいりました。

今回、そのさらなる新展開ということで、本市の石田市長の発議に基づいて、国の流域総合治水、あるいは流域総合水管理といった理念を受けて、水都大垣からこのフォーラムを通して全国に発信していきたいと考えているところです。つまり、湧水保全という枠組みよりもより広い範囲、範疇を持つ「水循環フォーラム」という新しい形で、水環境に関わる発信をしていきたいという趣旨で、このパネル談義を構成したいと考えております。

パネル談義の目的ですけれども、水を巡る地域教育ということで、まさに水を取り巻く事象は多種多様であります。加えて、それに様々な専門分野、思いから、見方や解釈があります。

このスライドにある野性味あふれるまさに川ガキと言っているこの子に、一つのたくましさは私は感じるものですが、こうした子供たち



をどういう形で今後育成することができるのか、彼のような子ども達は、川の自然や民族文化というものを将来にわたって自身の体験をもとにして守っていつてくれるのではないかと期待できるような情景であると思います。

水を巡る多様な事象というのは、①にありますように、一種の哲学的な議論、これについては、私、専門外ですので、詳しく申し上げるものではありませんが、それと、2番目の自然科学的な対象としての水というものもある。物質、あるいは地形、あるいは生命活動の中に水というものも多々存在しており、いわば生物学的な見方で水というものを見ることもできる。光合成や、細胞内物質の対処する媒体ということが書いてあります



すけれども、簡単に言えば、我々の体の6割以上は水分できているとよく言われていますように、我々自身、水を巡る環境そのものであり、存在であると言えるかと思えます。

そして、水というのは、今日基調講演にありましたように、治水あるいは利水として、我々の周りに水というものは存在をしており、いわばこれは、要る水は利水であり、要らない水は治水ということが言えるかと思えます。これは私、水の両義性というような言い回しをして、天恵と天災というような言い方をしております。

こういったようなアプローチで、水というものを見ることもできると思います。

今回は、特にこの親水という面、ただ親水といっても、憩いとか技術文化とか習俗行事といったような、水と親しむというレベルではなく、もう少し踏み込んだ形で、生物の多様性、あるいは生活史というような観点で、本日ご登壇いただいている方々は、地域の水環境の中で特徴的な生活をしている生物について、その保全を通して地域活動に活用する活動を継続的にされておられる方々といえます。

つまり、水循環というものを、生物を通して実感し、それらの健全性を、地域の宝物というような位置づけで育む、教育するということを目的とされていると私は認識しております。

郷土財というものについては、簡単に申し上げておくと地域の宝物という程度で、ここではご理解いただければと思います。

今日ご登壇いただいている4名の方々は、スライドの黄色の丸のところからお越しいただいております。

先ほど大槌町の佐々木課長から発表いただきましたが、大槌町はこちらにあります。

それから先に登壇された谷口さんの大野市はここにあります。2001年に、大野市では、イトヨの里が開館しております。その際に、大槌町の町長さん、もう亡くなられましたけれども、大野市にいられて、このスライドにありますように、イトヨの里の前で名刺交換されています。先ほど大野市の発表の中でも名刺交換してくださいというお話がありましたけれども、名刺交換文化がどうもあるようです。今のちょっと笑っていただきたいと思

い、あえて無理から洒落っぽいことを申し上げましたが、慣れない事はやめておきましょう。

要するに、大槌町も大野市も湧水が豊かで、こういった形でもう四半世紀、交流がある町であるということです。

それから、琵琶博から来ていただいている金尾さんの琵琶湖博物館はこちらです。

それから大垣の右隣にありますアクアトトぎふ、木曾三川の流域内にあって、ここも非常に淡水魚の豊かな場所に位置しています。

琵琶博の方とアクアトトの方に来ていただいた理由は、この二つの地域、琵琶湖淀川水系と木曾三川水系は、日本で最大級の淡水面積を誇り、且つ、淡水生物が豊かに生息しており、生物の多様な場所であるということで、それぞれ活動を通じたご見識からお話をいただければと思ったためです。

これでこのパネル談義の概要と理解いただき、ここからは具体的なお話を登壇者の方々に、まず5分程度ずつで、自己紹介と活動報告をいただき、その後、この活動の課題と今後の抱負をお話いただければと思っています。

では最初に池谷さんの方からお話いただければと思います。お願いします。

○池谷 幸樹 氏

はい。池谷です。

下の写真ですが、私30年前、実は東京でMR（メディカルプレゼンタティブ）という医薬品の営業をしていました。

当時はアスファルトジャングルの中で心が擦り切れておりました。昔は、先ほど森先生がおっしゃっていたようないわゆる川ガキでした。そういった経験に人は心のよりどころを求めよう、私は田舎育ちだったので、やっぱり川や生き物の世界に戻りたいということで、水族館へ転職しました。

五つの水族館を渡り歩いて、五つ目が現在の岐阜県のアクアトトぎふで、開館から仕事をさせていただいており、もう21年になります。

現在は、左の写真はタイのケンクラチャン湖という湖でメコンオオナマズという魚を抱きかかえている姿ですけれども、AD（アクアリウムディレクター）、館長として今に至るといった経歴を持っています。

基本、水族館ですので、展示を見ていただいて、生き物や水・自然に関心を持ってもらうのが我々の一番のミッションです。

実際、木曾三川でも源流から河口までの魚を一度に見ることは簡単ではありません。

約100種類近くの生物を一度に見られるのは、やはり琵琶湖博物館さんや、我々のような水族館です。飼育しているからこそ、多種多様な生物に親しむことができます。まずそれを知ってもらう、これだけでも十分な環境教育だと思っています。



それとは別に、昨年、1 回目を行った高校生SDGs 水環境サミット、大垣市さんの隣の羽島市で行ったときの様子です。

これは、生物部などで活動されている高校生に集まってもらって、生き物を保全していくためには何ができるのかや、どうしたらもっと環境のことをみんなで深掘りできるのかといったことを、自由に談義してもらい発表してもらおう試みでした。

これも本当に非常にいい試みだと思ひまして、私、たまたまコンビナーとして参加していましたが、とても有意義なものだと思います。このような活動のバックアップもしています。

こちらはそのときの全員の集合写真です。

その他にも、各務原市で小学生を中心に募集し、川の探検隊や田んぼ探検隊という形でフィールドに連れて行って、いろいろな自然体験をしてもらうような試みも、この 21 年間続けてきました。そういった水族館を使った、あるいは我々が得意とするフィールドで子供たちに生き物に触れてもらう機会を提供する、それが、今我々が最も行えている環境教育であり、今後も続けていく取り組みになります。簡単ですが以上です。

○森 誠一 氏

はい、ありがとうございます。ちなみにこの年 10 回連続受講ということは、10 回とも参加が必須でしょうか。

○池谷 幸樹 氏

必須ではないですが、最後にちょっとした賞状がもらえるので、それも楽しみに、皆さんちゃんと 10 回継続して参加されます。

○森 誠一 氏

卒業証書、修了証書のようなものがあるのですか。

○池谷 幸樹 氏

用意しています。



○森 誠一 氏

はい、ありがとうございました。時間の都合で、質問を受け付ける時間がないので、時々私の方から質問等させていただきたいと思っておりますのでご了承ください。
 それでは次に、中川さん、お願いいたします。

○中川 美穂 氏

福井県大野市開成中学校美術教諭 中川美穂です。

本校では、水循環と大野市の地下水をテーマに美術の授業を行っています。

授業を行うに当たって、私自身が大野の水のことを知りたいと思い、令和5年度に本願清水イトヨの里が中学生のイトヨ守り隊を結成したことを知り、生徒と一緒に参加しています。

こちらの写真は、令和6年度イトヨ守り隊の取り組みが、土木学会関西支部の地域活動賞を受賞したことが新聞に取り上げられたときの写真です。

まず、学校での取り組みを紹介します。

昨年度は、2年生がパブリックアートを制作しました。紙粘土や針金を使った立体作品を写真に撮り、公共空間の写真に重ねてデジタルアートにしました。大野の水への思いを表現した作品になります。



本年度の2年生はクレイアニメーションに挑戦しました。粘土でキャラクターを作り、少しずつ形を変えてコマ撮りし、水をテーマにしたアニメーションを完成させました。ポスター展示コーナーで動画を流していますので、ぜひまだご覧になってない方はご覧ください。

今のお話を伺って、中川さん、美術の授業というものも、我々の頃は、写生大会やスケッチだけで終わっていたような気がするのですけれども、ずいぶん中身が変わっているような印象を受けました。そのあたりはいかがですか。

○中川 美穂 氏

私自身は、中学校の時に美術科の教員に授業を受けることはできなかつたですけど、机に向かってレタリング（文字のデザイン）や、外で写生や絵を描くことが中心でした。現在求められている力は、自分の感じたことを伝える、そのための表現の一つとして、美術として形で表現したり、アニメーションで表現したりという、いろいろと選択肢がある中で、伝えるためにふさわしい手法を見つけていく手助けをすることが、私達美術科のサポートや授業をする目的ではないかと思っています。

○森 誠一 氏

ありがとうございました。よく分かりました。

自己表現を育成する、手助けをする、素晴らしい形であると感じました。

それでは引き続き、大槌町の小石さんからよろしくお願いいたします。

○小石 敦子 氏

岩手県の大槌町から参りました小石敦子と申します。

私は今年の3月まで、地元の大槌学園に勤めておりました。森先生には毎年、大槌にいらしていただき、5年生に湧水や町の天然記念物のイトヨについて教えていただいています。

画面に映っている校舎が大槌学園です。

大槌学園は、東日本大震災で被災した四つの小学校と一つの中学校が10年前に小中一貫教育校として開校し、翌年には義務教育学校としてスタートしました。標高28mの高台の校舎に通う1年生から9年生約600名の子供たちは、爽やかな挨拶に力を入れ、仲良く元気に学園生活を送っています。

2011年の東日本大震災では、皆様からたくさんのご支援をいただき、本当にありがとうございました。

大槌町は、震災前1万6000人ほどの町でしたが、大津波とそれに伴う火災などによって1286名の方々が亡くなりました。宅地の浸水率は52%、商業地の浸水率は98%に上ります。

甚大な被害を受けた大槌町ですが、震災からの教育の復興や新しい取り組みにはスピード感がありました。当時の伊藤教育長の「何もかもなくなった今だからこそできる」とい



う発想は、逆境をチャンスに変え、小中一貫教育の他「ふるさと科」という町独自の科目がスタートしました。

「ふるさと科」は、「生きる力」と「ふるさと創生」の教育の推進を目的とし、「地域への愛着」「生き方・進路指導」「防災教育」の三つの柱に沿って授業が展開されています。

ふるさと科の特徴は、教室での座学ではなく、実践を通した学びを重視していることです。そのため、講師は教員ではなく、地元大槌をよく知る地域の方々や、森先生といった専門の方々になっていただいています。

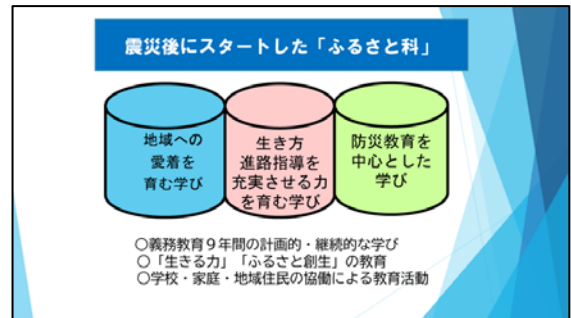
大槌町は、昔から井戸が至るところにありました。冷たい水は美味しく、野菜を冷やすなど生活用水として欠かせないものでしたが、震災後、多くの井戸はなくなってしまいました。しかし現在は、新たに湧水によってできた池の周辺を「郷土財活用湧水エリア」として整備しています。

イトヨは元々源水川に生息していましたが、震災後、郷土財湧水エリアにも、淡水型イトヨと、海から遡上したイトヨが生息していることが分かりました。

森先生は、湧水エリアの池に前もって仕掛けをし、貴重なイトヨを直接子供たちに見せてくれます。実際に生息している場所で実物を見た子供たちからは歓声が上がっていました。

この池の名前、「憩い池」や「恵池」「きずな池」は、3年前に森先生の授業を受けた子供たちが命名しました。「恵池」と名付けた理由は、大槌にたくさん湧水があるのは天の恵みだから。選ばれなかった名前でも、例えば「文化池」の理由は、湧水を守ることが大槌の文化だからなど、子供たちは森先生から学んだことをもとに、大槌の湧水を大切に考えていることが分かります。

また、この郷土財エリアには、青紫色のかわいい花をつける希少植物のミズアオイが生育しています。これは、津波によって地中に眠っていたミズアオイが発芽したものです。



子供たちは、湧水、イトヨ、ミズアオイなどを学びながら、ふるさと大槌の良さを体感しています。

4年生は水生生物調査を行っています。この調査は、30年以上前から各学校で行ってきた活動です。川に住んでいる生物の種類をもとに、どのくらい綺麗かを調査します。川を直接調べることで、子供たち自身、これからも水環境を守っていかうという意識が高まっています。

また、3年生は地域の人たちと一緒に町内の海探検や山探検をしながら、ふるさとの自然を知るなど、それぞれの学年を通して環境についての学習を深めているところです。



○森 誠一 氏

はいありがとうございます。

先ほどの写真、震災直後のあの瓦礫の山というのを見ていただけでしょうか。

私もその直後にお邪魔し、その後も通い続けているのですけれども、本当に悲惨な状況でありました。

その当時、震災直後に、大野市では、赤十字だけではなく、大槌町に直接の支援を行う支援箱も設けられていました。そういう繋がりもあり、大槌町の支援に大野市から行かれています。

先ほど佐々木さんからは、行政の立場からのまちづくりについてお話いただき、今、小石先生からは教育という側面からの地域づくりをお話いただきました。行政の取り組みと、教育現場の取り組みとがうまくマッチングしていると理解していいのではないかと思います。

それでは、金尾さん、お願いします。

○金尾 滋史 氏

滋賀県立琵琶湖博物館から参りました金尾滋史といいます。名前は「滋賀の歴史」と書いて滋史（しげふみ）なのですが、生まれは広島県で、滋賀県とは関わりはありませんでした。しかし、今では滋賀にどっぷりの人間になっております。

皆さん、滋賀県といえば、琵琶湖を思い浮かべるのではないかと思います。

琵琶湖は、実はただ日本一大きな湖というだけではなく、400万年の歴史を持ち、世界でも3番目に古い古代湖と言われています。そういう長い歴史の中で、固有種と呼ばれる生き物が生まれたり残されており、さらに、湖と人との関わりというものも存在しています。詳しくは、ぜひ琵琶湖博物館に来て学んでいただけたらと思います。

そんな琵琶湖のある滋賀県は、よく「湖国」とも呼ばれるのですが、実は県内にも数々の湧水、湧き水があります。

その中で、高島市の針江というところが有名なのですが、川端（カバタ）といまして、大垣市と同じように、家の中に湧き水が出てきて洗い場があります。こちらの地域では生きた水と書いて「生水（しょうず）」と呼んでいます。

そして湧水があるからこそ、岐阜県と同じように、滋賀県東部にハリヨがいたり、バイカモが生育していたりします。

そのような中で、生き物と人との関わりが深いということが特徴になっております。

県内で、私は博物館の学芸員としていろいろなことを行っております。

特に、私はハリヨやホトケドジョウ、スナヤツメの研究をしています。また、水田を利用する魚の研究や保全を行っており、そういう中で、地域の方と一緒に活動を行ったり、博物館で観察会を行ったり、博物館が主催するだけではなく、県内様々な地域の団体や NPO の方など主催する観察会に講師として参加しています。

そしてもう一つ、地域や企業の方が生物多様性とその保全に興味を持っておられて、工場内や公園にビオトープを作って保全活動を行っています。そのようなことが実って、地域の活動、企業の活動が、県の条例に基づく希少野生動植物種の保全活動というものに認定されるということもあります。

滋賀県といえば琵琶湖ですが・・・

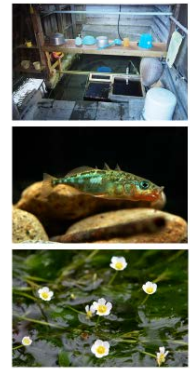
- 400万年の歴史を誇る古代湖
- 様々な固有種がいる
 - ビワコオオナマズ
 - ビワマス
- 様々な時代での「湖と人との関わり」
 - 湖での漁業の発達
 - 湖魚料理の文化
 - 水辺遊びの文化



滋賀県内にある湧水

- 琵琶湖や河川の周辺にも多くの湧水がある
- 湧水と共に暮らし
 - 生水（しょうず）、カバタ
- 湧水があるからこそ生きている生き物たち
 - ハリヨ、スナヤツメ類、バイカモ

生き物と人との関わりも深い



湧水の生き物を守る取り組み

- 湧水性の生物の調査・研究
 - 県内におけるハリヨの分布調査
 - 河川や水路の湧水域
- 観察会などを通じた地域での交流活動
 - 博物館主催のものや地域から依頼をうけて実施するものまで
- 地域や企業と協働した保全活動
 - 地域での生息域内保全
 - 保全池を活用した生息域外保全
 - 県の条例における認定活動



今回トピックで紹介したいことは、この自然観察会です。

今日、このように子供たちが川に入るということは、実は日常ではなくなってきました。危ないから入ってはいけませんということがあるからです。このため、今は非日常のイベントという形にはなっているのですけれど、このような自然観察会が各地で行われています。

単にこの観察会をやってよかった、楽しかった、いろんな生き物を教えてもらったということだけではなく、観察会で子供が採ってきた魚が滋賀県で初めて見つかった魚であったり、びっくりするような外来種が初めて見つかったりするという、たくさんの目だからこそ分かることもあって、ただ教育普及として観察会をするだけではなくて、実は科学的なデータにも昇華できるような発見もあります。

もう一つ具体例があります。

毎年、滋賀県の守山市で行われている観察会で、私自身ももう 10 年以上講師として参加しています。

毎年同じ場所で同じぐらいのメンバーが行っていると、いろいろな記録が残ります。そしてモニタリングに発展して、それが保全に関わる科学的なデータになるということ、子供たちにも伝えています。

ここの 2015 年から 16 年の間に、実は水路の改修工事が行われました。

このときにも地域から環境や生き物を守ってほしいという声が上がって、この観察会のデータが基になって、保全の対策を練ることができました。

また 2019 年には、コクチバスというちょっとびっくりするような外来種を子供が捕まえるようなことも起こりました。実際、こういう自然観察会は、単に教育普及の場だけではなく、調査、そして地域の保全に関する科学的なデータとしても機能しているということが示せるのではないかと考えています。こういった地域の自然観察、自然体験のあり方を提唱しているところです。

○森 誠一 氏


はい、ありがとうございます。

コクチバスはどういうところが驚きだったのですか。

○金尾 滋史 氏

自然観察会という機会の役割

- 子ども達（大人も）に野外、身近な自然を安全に体験してもらう場（残念ながら非日常）
- 博物館が主催するだけではなく、地域団体、NPO、行政等様々な主体が主催し、講師として参加
- フィールドへの誘いとなる博物館活動



たくさんの目による観察が行われる
時には学術的に貴重な種の発見もある!!

同じ場所で毎年自然観察会が行われる意義

- 県内各地に講師として参加している観察会
- 正確な記録を取り続けていくことでモニタリングに発展し、保全に関わることができる = 調査になる



水路の改修工事が行われる ↑

子供が50人ぐらい参加していたのですが、最初に採ってきた魚が、今までの観察会で採れたことがないコクチバスでした。そして、これが滋賀県の平野部で初めてコクチバスが確認された事例にもなり、なぜここにいるのかと、私自身が驚きました。

○森 誠一 氏

ちなみに現状は増えているのでしょうか。

○金尾 滋史 氏

実は、この年以降、コクチバスは採れていません。この年だけは、後の調査も含めて3匹だけ採れて、どうも上流の頭首工から流れてきたのではないだろうかという説ですが、上の方では若干増えている状況です。

○森 誠一 氏

はい、ありがとうございます。

一通り4人の方にお話をいただき、自己紹介を含めながら、活動の中身についてお話をいただきました。

それでは二つ目の課題と抱負という点について、金尾さんから、引き続きよろしく願いいたします。

○金尾 滋史 氏

いろいろな活動に参加させてもらっているのですが、悩ましいところは、一つは、科学的な情報、科学的な知見が必ずしも地域の行動と完全に繋がるということがないことです。地域の方々の判断も当然ありますので、これぐらいはいいだろうということが、実は移動させてはいけない個体群を持ってきてしまったということもあったり、行政の河川改修が実は壊滅的な生息地破壊を招いたりということも実際にはあるわけです。

その辺はうまく浸透していかなくてはいけないということ、それぞれの主体の考えは尊重していくことで課題が見えてくるのかなと思います。

活動している方々の成果が目に見えるときもあれば、失敗が続くときもあり、失敗が続くとモチベーションも下がってしまいます。

私はいろいろなハリヨの池の保全に関わっているのですが、なんと4か所で、アメリカザリガニが増えており、採っても採っても減らない。湧水だから冬も出てくるのです。多分今年だけで2000匹以上採っていると思うのですがけれど、アメリカザリガニとの終わりなき戦いがずっと続

**保全を考えていく上での
いろいろな課題**

- 科学的な情報≠地域・行政の考え方
- 「これくらいはええやろ」が招いてしまうこと(放流や改修)
- それぞれの考え方の違いの尊重
- 各主体ができることは？
- 地域ごとに課題も大きく異なる
- 年によって成果が見えにくい
- 目に見える成果と失敗
- 終わりがなきザリガニとの戦い
- とにかく時間がない・・・

**モチベーションをどう保ち
続けていくのか？**

いていて、誰か助けてと言いたい状況ではあります。そういう保全に対するモチベーションを持ち続けていくことが、大きな課題の一つかなと思っています。

そしてもう1個、観察会等での教育普及、子供たちに伝えていく中で大きな話をこれからしたいと思います。

生物の保全を考えると、人と生き物との関わりを体験することの重要性です。実は、いろいろな生き物がいたら、生き物がただいるわけだけではなくて、いろいろな人との関わりというものがあります。例えば、食べる、方言、魚のつかみ方など、いろいろなものがあります。

これを仮にハリヨという形で見てみると、滋賀ではハリンタやハリンチョといった地方名があります。この中でハリヨが消えていくと、人とハリヨとの関わりも消えます。ここから文化が消えていきます。

しかし、頑張っって保全を続けていくことで、生き物は戻ってくることがあります。ただ、戻ったときに、人との関わりが戻ってこないのです。

ここを私自身はかなり意識して、子供たちだけではなくて大人たちにも伝えていきます。

生き物だけではなく、生き物と人との関わりも含めたことを子供たちに伝えていく。

観察会のために、たまたまおじいさんがおられたら、この魚はこの地域でなんて呼んでいたのか、どんな採り方をしていたかという話を聞きます。そして、網を使わず手づかみだけで取っていたと聞いて、みんなでやってみようと言うと、今の子供達は手づかみでは魚が取れないということもあります。

そうやって人と生き物との関わりも一緒に残していく、関わりも再生する、場合によっては時代に即して新しく創造していくということは重要になってくるのではないかと思います。私自身、魚類の研究をしておりますけど、生き物と人との関わりも一緒に付いていくようにするにはいけないと考えています。この普及教育、交流事業をしていく中で、芯に持っていることですので、皆さんにもぜひ知っておいてもらえたらと思っています。

○森 誠一 氏

はい、ありがとうございます。

それでは引き続き、小石さん、お願いします。

○小石 敦子 氏



活動をさらによりよいものにするため、三つの課題とその課題解決についてお話しします。
まず一つ目は、活動を続けていくための人的環境です。

「ふるさと科」には毎年、地域の方々が講師などで250名以上参加します。講師を教員が探すのはなかなか大変です。また、講師との連絡調整も容易ではありません。

その課題解決として、学園には地元をよく知る「学校支援地域コーディネーター」が常駐しています。このコーディネーターが活動にぴったりの講師を地元から探したり、学園と地域を繋いだりする役目を担っています。

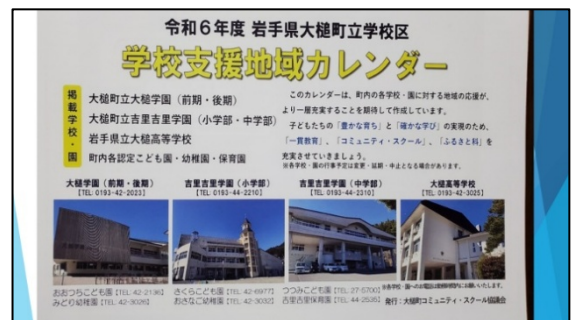
コーディネーターの活動拠点は、地域の方がいつでも気軽に出入りできるように、体育館玄関の隣にあり、その活動の部屋を「井戸端会議室」と呼んでいます。井戸端会議室は地域の方を始め、教員や子供たちにも憩いの場になっていて、私も毎週、井戸端会議室に通っていました。

二つ目の課題は、活動をどう外へ発信していくかです。

保護者の方や地域の方には、毎年秋に行われる学園祭で、湧水やイトヨのことなど、学習したことを発表しています。また、毎年1月の教育実践発表会でも町民の方々に披露しています。

発信の成果の一つが、コーディネーターが毎年作成している「学校支援地域カレンダー」です。このカレンダーは、町内3校の「ふるさと科」や大槌高校の「地域探究科」の取り組みの様子を写真で紹介しています。カレンダーは各家庭や公共施設、商店にも配布され、子供たちの活動を知ってもらい、活動について、家庭や地域などで話題にしてもらえるとといった良さがあります。

この月は、イトヨの学習や湧水の池の命名式の様子などが紹介されています。カレンダーには各学校や町内のこども園などの行事が掲載されています。



10月		日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	4	5
				6	7	8	9	10
				13	14	15	16	17
				20	21	22	23	24
				27	28	29	30	31

三つ目の課題は、学びをどう自分事にするかです。

学びが受け身では自分のものにはなりません。先ほど紹介した5年生の子供たちが付けた池の名前はこれからもずっと残ります。子供たちが町づくりに直接参画できたことはとても大きなことでした。

「ふるさと科」を作った伊藤教育長は、「ふるさと科」の学びを「地域課題解決型学習」として高校へ繋ぐ構想を立てていました。現在、大槌高校では、「地域みらい学」や「復興研究会」「はま研究会」などに所属しながら、「マイプロジェクト」という一人一人が進んで地域課題に取り組み、アクションを起こしています。郷土財湧水エリアの保全にも積極的に参加し、「はま研究会」に所属している生徒は、森先生から助言をいただきながら引き続きイトヨの生態調査を行っています。別な生徒は釣りや魚が好きすぎて、県外募集で大槌高校に入学し、捕った魚でミニ水族館を作り、地域の方々や子供たちに開放しています。

湧水もイトヨもミズアオイも、小さい頃からふるさとを学ぶことにより、ふるさとへの愛着が湧き、ふるさとを大切にしようという心が育ちます。そして次には、ふるさとのために何ができるかを考えるようになります。

イトヨの授業で、ある子供が森先生に「絶滅危惧種のイトヨは今後どうなるのでしょうか。」と聞きました。すると先生は「それは君たち次第です。」と答えられました。ここで子供たちは、自分なら何ができるかと、自分事として考えます。

水生生物調査の講師の方は、SDGsの持続可能な取り組みとして、「川を綺麗にするためには、一人の千歩よりも千人の一步が大切。多くの仲間と一緒に取り組んでほしい。」と話されました。ここで子供たちは「川を綺麗にするために仲間と何ができるだろう。」と考え、学びがここから深まります。

大槌学園の学園歌の1番の歌詞には「いのちの輝きと真心を繋いでいこう 湧水に遊ぶ大らかなイトヨのように」とあります。これからも「ふるさと科」をもとに、ふるさとに主体的に関わり、ふるさとの良さを理解し、ふるさとを大切にすることを目指す子供たちを支えていきたいと思えます。

○森 誠一 氏

はい、ありがとうございました。

もうこれでパネル談義を終わろうかと思うぐらい、まとめていただいたような気もいたします。中川さん、それでは次よろしく願いいたします。

○中川 美穂 氏

イトヨ守り隊の活動としての課題、そして抱負、そして美術教諭としての課題と抱負を述べたいと思います。

まずイトヨ守り隊の活動としての今後の課題ですが、本願清水イトヨの里は、市外市内から遠足や校外学習活動の場として、春休みや夏休みに近所の子どもの遊び場として20年来親しまれてきましたが、児童生徒数の減少によりイトヨの里の来館者数は、コロナ前まで戻っていないそうです。

イトヨ守り隊ですが、中学生になると参加できるのですけれど、中学生の生徒たちから積極的に参加したいという声が少なくなっている状況も課題かと思えます。

今現在、写真に写っているメンバーが今年のイトヨ守り隊です。数は少ないですがイトヨを守るということで、自分たちの生活環境を守ることであったり、イトヨを保全することは大野の水環境を守ることでもあるということ、活動を通して、生徒たち、私自身は実感しているので、もっとたくさんの人、生徒が関わるといいなというのが今後の課題だと思います。

抱負としては、イトヨ守り隊のこの活動を通して、フィールドワークで大野の自然を学んだり、地域や行政との世代を超えた交流を深めることで、水文化や自然環境を未来へ繋ぐ、担い手を育てていきたいということと、イトヨとイトヨの里の魅力を広く発信し、遠足や校外学習だけでなく、家族連れや地域住民が気軽に訪れられる場として活用してもらえるようになるというの抱負になります。

美術教諭としての今後の課題と抱負ですが、現在、開成中学校の3年生は、私が初任校として来たときの1年生のときから、総合的な学習と関連づけて地域の魅力を作品として表現する活動を続けてきました。

1年生では、各小学校で学んできたことを共有しようということで、大野市の魅力って何だろうという再発見をしようということで、小学校区を超えた繋がりを持つことができるように、大野市の魅力は何というのをテーマにカバン作り、文様で表現しようということをしました。

その際、多くの生徒が、大野市の魅力というのは、星とそして水であると感じていることが明らかになりました。こうした気づきを受けて、2年生のときには環境・水循環課の方に出前授業をしていただいて、大野の水についてさらに深く学びました。そして先ほどのパブリックアートの作品を作りました。

このご縁から、水のがっこうとイトヨの里に作品を展示していただくなど、地域との繋がりを意識した活動へと発展していきました。

生徒数が減少する中で、大野市でも中学校が5校から2校に統廃合されて、部活動も地域移行が進んでいて、今後は校内に留まらず、地域住民や他校との連携を広げていくことが課題ではないかと思えます。

抱負としては、せっかくのご縁がありますので、この美術の授業と地域の活動を結びつけることで、単なる制作にとどまらず、水文化を未来へ繋ぐ教育活動へと発展させていくことが目標になります。

生徒が自ら地域と関わり合いながら表現する経験を通じて、学びを社会に生かす力を育てていきたいというのが抱負です。

○森 誠一 氏

はい、ありがとうございます。

これもまたこの談義の締め言葉になる内容でした。途中の星と水というようなキャッチフレーズはとても興味深いと思いました。

生物多様性復活のシナリオとしては、日本の平野が氾濫原に戻れば（これは治水対策もしつつの話）、河口の葦原や干潟も復活して、海も豊かになって、漁業や農業生産が上がります。人口が減るわけですから食料自給率も上がるということで、いいことづくしだと私は夢見ています。

自分が100年後には当然いないですが、決して暗い未来ではなく明るい未来が待っているということも同時に伝えていきたいと思っています。



○森 誠一 氏

はい、ありがとうございます。

これで4名の方が2回お話をいただいたかと思えます。

今日のパネル談義の四つの話題提供の一つのまとめということで、要するに、感情移入しやすい生物を通して水循環というものを理解、実感し、その健全性というものを、次世代と住民の連携で地域の宝を育む教育を目的として実践しているというお話をいただいたと私は思います。

小石さんからは、ふるさと科という教育過程から、守るから生かすという内容と理解しました。

中川さんからは、美術の教員をされていることもあり、感性ということ強く感じたものでありました。

金尾さんからは、モニタリングという部分の連携性について強調されたお話をいただいたかと思えます。

池谷さんにおいては、野外体験、これは金尾さん

とも共通する部分がありますけれども、人口減の両義性とあえて言ってもいいかもしれませんが、減少して悪いことばかりでもないということで、そのこと自体も両義的に考え得るというプラス思考をお話から感じました。

共通点としては、水で結局繋がる命と、最初に私申し上げたように、水というものを様々な観点で我々は関係しているということで、今日は特に生物というものを通じてお話をいただきましたけれども、まさに水で繋がる命というもの、これは先ほど堺さんのお話にもありましたけれども、活動する際においても、楽しいだけではなく根拠を持つということ、そういったことを通じて、生物というものは人の感性と交差して生き物となると、あえてここで私は生物と生き物というのを分けて考えていると、今日お話いただいたものは生物学的な生物というよりは、先ほど金尾さんが人との関わりという点を強調されておられました、まさにそれは生き物ということが言えると思います。若干宣伝になりますけれども、こういった形で生き物を扱う学問が、生き物文化誌学会というのがありますので、

4. パネル談義: 4つの話題提供と一つのまとめ

感情移入しやすい生物を通して水循環を理解・実感し、その健全性を次世代と住民の連携で「郷土財」として育む(教育)を目的。

- ・小石さん: 「ふるさと科」、 “守る” から “活かす”
- ・中川さん: 感性、地域活動参画
- ・金尾さん: 住民・企業との連携モニタリング
- ・池谷さん: 野外体験と “人口減の両義性”

共通点 「水でつながる命」

楽しく、ただし根拠をもって

そこで、生物は人の感性と交差して生き物となる。

仕組み(継続) → 参画(当事者) → 育成(教育)

連携(地域交流) と 伝承(世代交流) = 文化へ

生き物文化誌学会と検索していただければ出てくるかと思しますので、当学会の編集委員として宣伝をさせていただきます。

要は、今日お話いただいた活動は仕組み、継続するために“仕組み”がつくられて、そこに参画すると“当事者意識”を持ち、そしてさらにそれを育成する、つまり“教育”という、この3点を順繰りにされている構造をご紹介いただいたと思います。

つまり、それは地域における連携と伝承につながっていくものになります。ここからの議論は長くなってしましますが、おそらく金尾さんが言わんとしているところと関連して、こうした活動を日常化・平常化する、つまり文化にするということになるのではないかと思います。

今後また、先ほど廣瀬さんからのお話があった流域総合水管理における流域治水、利水、流域環境ということに加えて、流域文化という側面の育成を後押しすることが国にも求められていくのではないかと思います。今、廣瀬さんが見えでしたらどう捉えられるかをお尋ねしたいと思うものでもあります。

つまりハードなものだけではなくて、もっとソフトを入れ込むという施策が今後必要になってくると思います。そういう意味においては、事例発表いただいた4名の方々、パネリストの4名の方々、計8名の方々のお話から流域文化というものへの視点とその重要性を、本日は確認し得たと思うところです。

以上をもちまして、パネル談義をこれで終了させていただきたいと思っております。皆さんありがとうございました。

